

お姫さまと乞食の女

小川未明

青空文庫

お城しろの奥おく深ふかくお姫ひめさまは住すんでいられました。そのお城しろはも
 う古ふるい、石垣いしがきなどがところどころ崩くずれていましたけれど、入いり
 口ぐちには大おおきな厳いめしい門もんがあつて、だれでも許ゆるしがなくては、入はい
 ることも、また出でることもできませんでした。

お城しろは、さびしいところにありました。にぎやかな町まちへ出でるに
 は、かなり隔へだたっていましたから、木きの多おほい、人里ひとざとから遠とおざか
 ったお城しろの中なかはいつそうさびしかったのであります。

お城しろの中なかには、どんなきれいな御殿ごてんがあつて、どんな美うつくしい人
 々とびとが住すんでいるか、だれも知しつたものがなかつたのです。旅たび
 人ひとは、お城しろの門もんを通とおり過すぎるときに、足あしを止とめてお城しろのあちら

を仰あおぎました。けれど、そこからは、なにも見るみことができませ
んでした。

「なんでも、きれいな御殿ごてんがあるということだ。」と、一人ひとりの旅た
びびと

人ひとがいますと、

「美しいお姫ひめさまがいられて、いい音楽おんがくの音色ねいろが、夜よるも昼ひるもし
ているということだ。」と、また他たの一人ひとりの旅たびびと人ひとがいつていま
した。

こうして、旅たびびと人ひとは、いろいろなうわさをしながら、そのお城しろ
の門もんの前まえを去さってしまつたのであります。

お城しろの中なかには、美しい御殿ごてんがありました。そして御殿ごてんの一室しつに、
美しいお姫ひめさまが住すんでいられて、毎日まいにち、歌うたをうたい、いい音ね
ううつく

いろ色をたてて音楽おんがくを奏そうせられ、そして、窓まどぎわによりかかつては、
 遠とおくそらの空をながめられて、物思ものおもいにふけていられました。そ
 のことはだれも知しることができなかつたのです。

お姫ひめさまは、このお城しろの中なかで大きくなられました。そして、こ
 のお城しろの内うちしかお知しりになりませんでした。お城しろの中なかには、大き
 な林はやしがありました。また、大きな濠ほりがありました。林はやしの中なかには、
 いろいろな鳥とりがどこからともなく集あつまってきて、いい声こえでないて
 いました。またお濠ほりや、池いけの中なかには、珍めづらしい魚うおがたくさん泳およいで
 いました。そのほか、御殿ごてんの中なかには、この世よの中なかのありとあらゆる珍めづら
 しいものが飾かざられてありました。けれどお姫ひめさまは、もはや、
 そんなものを見るみることに飽あきてしまわれました。

「ああ、わたしは、このお城しろの中なかにばかりいることは飽あきてしまつた。このお城しろの中なかから外そとへ出てみたいものだ。」と、お姫ひめさまは思おもわれました。

このことをおつきのものに話はなされますと、おつきのものは、びつくりして、目めを円まるくしていいました。

「それはとんでもないことです。このお城しろの内うちほどこいいところは、どこへいってもありません。お城しろの外そとに出でますと、それはきたないところや、暗くらいところや、また悪い人わるにんげん間かんなどがたくさんにいます。安心あんしんすることができません。お城しろのうちほど、いいところがどこにありますものですか。」と申もうしました。

しかし、お姫ひめさまは、だれがなんといつても、やはり、お城しろの

外そとに出て、世よの中なかというものを見みたいと思おもわれました。

「世よの中なかというところは、どんなところだろう。そこには、にぎやかな町まちがあるということだ。その町まちへいったら、きっと自分じぶんの知しらないおもしろいことがたくさんにあるに相違そういない。そして、いろいろな歌うたを聞きかれるにちがいない。どうかして、わたしは、その世よの中なかを見みたいものだ。」と、お姫ひめさまは思おもわれたのであります。

林はやしの中なかには、いろいろな小鳥ことりがきてさえずっていましたけれど、その小鳥ことりは、もはやお姫ひめさまには珍めづらしいものではなかったのです。しかるに、あるとき、遠とおい南みなみの方ほうから渡わたつてきたという、赤あかと緑みどりと青あおの毛色けいろをした、珍めづらしい鳥とりを献けんじ上じょうしたものがありました。

お姫^{ひめ}さまは、この鳥^{とり}が、たいそう氣^きにいられました。そして、
自分^{じぶん}の居間^{いま}に、かごにいれて懸^かけておかれました。小鳥^{ことり}は、じき
にお姫^{ひめ}さまになれてしまいました。しかし、小鳥^{ことり}も、自身^{じしん}の生^うま
れた、遠^{とお}い国^{くに}のことをときどき、思^{おも}い出^だすのでありましよう。か
ごの中^{なか}のとまり木^ぎに止^とまって、遠^{とお}くの青^{あお}い、雲^{くも}切れのした空^{そら}をな
がめながら、悲^{かな}しい、低^{ひく}い音^ね色^{いろ}をたててなくのでありました。す
るとお姫^{ひめ}さまも悲^{かな}しくなつて、涙^{なみだ}ぐまれたのであります。そして、
やはり、あちらの空^{そら}を見^みていられますと、白^{しろ}い雲^{くも}が夢^{ゆめ}のように飛^と
んでゆくのでありました。

「おまえは、なにをそんなに考^{かん}えているの？　しかし、おまえは
こんなに遠^{とお}い他^た国^{こく}にくるまでには、さだめしいろいろなところを

見てきたろうね。町や、海や、港や、野原や、山や、河や、また
 珍しいふうをした旅人や、その人たちの歌う唄などを聞いたり、
 見たりしてきたにちがいない。しかし、わたしは、そんなものを
 聞くことも見ることもできない。」

お姫さまは、こういつてなげかれたのであります。

お城の内には、さびしい秋がきました。つぎに木の葉のことごとく
 落ちつくしてしまふ冬がきました。いろいろな木の実が紅く
 熟し、それが落ちてしまふと雪が降りました。そして、しばらく
 たつとまた、若草が芽をふいて、陽炎のたつ、春がめぐつて
 きたのであります。

お城の内には、花が咲き乱れました。みつばちは太陽の上る

前から、花の周囲に集まって、羽を鳴らして歌っていました。

ほんとうに、のびのびとした、いい日和がつづきましたので、お

城の門番は、退屈してしまいました。どこからともなく、柔

らかな風が花のいい香りを送ってきますので、それをかいでいる

うちに、門番はうとうとと居眠りをしていたのであります。

ちようど、そのとき、みすばらしいようすをした女の乞食がお

城の内へ入ってきました。女の乞食は門番が居眠りをしていま

したので、だれにもとがめられることがなく、草履の音もたてず

に、若草の上を踏んで、しだいしだいにお城の奥深く入って

きたのであります。

お姫さまは、おりから、怪しげなようすをした女がこちらに近

づいてくるのをごらんになりました。そして、よくそれをごらんになると、自分じぶんと同じ年おなとしごろの美しい娘うつくむすめでありました。お姫ひめさまはこんなに美しい娘うつくむすめが、どうして、またこんなに汚きたならしいようすをしているのかと怪あやしまれたのです。

「おまえは、だれだ？」と、お姫ひめさまは、おたずねになりました。すると女おんなの乞食こじきは、悪わるびれずに、

「わたしは、貧ますしい人間にんげんです。親おやもありませんし、家うちもないものです。こうして諸方しよほうを歩あるいて、食たべるものや、着きるものをもらって歩あるく人にんげん間あひだなのでございます。」と答こたえました。

お姫ひめさまは、その話はなしを聞いていられる間あいだに、幾いくたび、びつくりなされたかしれません。そして、この女おんなが、乞食こじきであることをは

じめてお知りになりました。

「おまえは乞食こじきなの？」と、お姫さまはお問といになされました。

「さようでございます。」と、汚きたならしいようすをした女は答おんなこたえましました。

お姫ひめさまは、つくづくと女おんなの乞食こじきをごらんになつていましたが、
小ちいさな歎たんそく息をなされました。

「なんという、おまえの目めは美うつくしい目めでしょう。」とおつしやられました。

女おんなの乞食こじきは、お姫ひめさまを見み上げて、

「そんなに、わたしの目めがよろしければ、あなたに、目めをさしあげましょう。」と申もうしました。

お姫^{ひめ}さまは、なおつくづくと女^{おんな}の乞食^{こじき}をごろんなされていたが、
 小^{ちい}さな歎息^{たんそく}をなされて、

「まあ、なんというおまえの髪^{かみ}の毛^けは美しいのだろう。」といわれ
 ました。

女^{おんな}の乞食^{こじき}は、長^{なが}い、黒^{くろ}い髪^{かみ}の毛^けを手^てでかきあげながら、

「わたしの髪^{かみ}の毛^けが、そんなによろしければ、あなたにさしあげ
 ましょう。」と申^{もう}しました。

お姫^{ひめ}さまは、前後^{ぜんご}のわきまえもなく、女^{おんな}の乞食^{こじき}に抱^だきつかれま
 した。

「ああ、なんというおまえの心^{こころ}はやさしいのでしよう。目^めも髪^{かみ}の
 毛^けもみんなおまえのもので、だれもおまえから取^とることができは

しない。わたしがどうして、これをおまえからもらうことができ
 ましょう。わたしは、それをほしいとは思いませんが、どうか、
 おまえのきている着物きものをおくれ。そして、おまえは、わたしの着き
 物をきて、わたしのかわりとなって、しばらく、このお城しろの内うちに
 住すんでいておくれ。わたしは、おまえになつて、広い世ひろよの中を見み
 てきたいから……。―と、お姫さまひめは、女おんなの乞食こじきにむかつて、ね
 んごろに頼たのまれました。
 女おんなの乞食こじきは、下したを向むいて、しばらく考かんえていましたが、やがて
 顔かおを上げ、

「お姫さまひめ、わたしは、なんでもあなたのおつしやることを聞き
 ます。しかし、わたしみたいなものが、お姫さまひめのかわりとなつ

ていることができましようか。」と申しました。

お姫さまは、軽くうなずかれ、

「わたしがよく、侍女に頼んでおきます。そして、そんなに長

くはたたない。じきにもどってくるから、どうかわたしのいうこ

とを聞いておくれ。ぜひお願いだから……。」といわれましたの

で、女の乞食は、ついにうなずいて、お姫さまのいうことを聞

きました。

お姫さまは、侍女をお呼びになつて、そのことを話されます

と、侍女は、びつくりして目を円くしました。

「お姫さま、そんなお考えをお起こしになつてはいけません。ど

んなまちがいが無いともかぎりません。」と、おいさめ申しまし

たが、お姫^{ひめ}さまは、どうかわたしの希望^{きぼう}をかなえさせておくれ、きつとその恩^{おん}は返^{かえ}すからといって、ついに、女^{おんな}の乞食^{こじき}に姿^{すがた}をやつされました。そして、城^{しろ}を立^たちいでられることになりました。

門^{もん}番^{ばん}が見^みつけたら、またひと災難^{さいなん}であろうと、お姫^{ひめ}さまは心配^{しんぱい}をなされましたが、門^{もん}番^{ばん}はこのときまで、まだいい心地^{こころ}に居眠^{いねむ}りをしていましたので、乞食^{こじき}のふうをした若い女^{わかおんな}が、自分^{じぶん}の前^{まえ}を忍^{しの}び足^{あし}で通^{とお}り過^すぎたのをまったく知^しらなかつたのであります。

お姫^{ひめ}さまは、往來^{おうらい}の上^{うへ}に出^でられました。その道^{みち}を歩^{ある}いてゆくと、どこまでも道^{みち}はつづいています。そして、ゆきつきるということがありませんでした。お城^{しろ}の内^{うち}は、いくら広^{ひろ}くても、一日^{いちにち}の

中には、まわりつくしてしまふことができませんのに、往來はど

こまでいっても、はてしがなかつたのです。そればかりでない、

青々とした野原や、花の咲く圃などを右に左に見ることができ

ました。緑色の空は、円やかに頭の上に懸かつて、遠く地

平線のかなたへ垂れ下がっています。春風は、遠くから吹い

て、遠くへ去っていきます。百姓が愉快そうに働いています。お

姫さまは、なにを見ても珍しく、心も、身ものびのびとなされま

した。

「ああ、世の中というものは、なんという楽しいところだろう。」

と、お姫さまは思われました。そして、いままでお城の内です

いた生活は、なんという窮屈な生活であつたろうと思わ

れました。

あるところでは、山^{やま}が見^みられました。また、あるところでは、
 おおかわ^なが流^{なが}れていました。その河^{かわ}には橋^{はし}がかかっていました。お
 姫^{ひめ}さまは、その橋^{はし}を渡^{わた}られました。すると、あちらに、にぎやか
 ないろいろな建^た物^{もの}のそびえている町^{まち}があつたのであります。こ
 の乞食^{こじき}のようすをした、お姫^{ひめ}さまに出^であつた人^{ひと}々^{びと}の中^{うち}には、気^き
 の毒^{どく}に思^{おも}つて、お姫^{ひめ}さまの側^{そば}に寄^よつてきて、

「どうして、おまえさんは、そんなに若^{わか}いのに乞食^{こじき}をするのです
 か？」と、聞^きいたものもありました。

お姫^{ひめ}さまは、こういつて聞^きかれると、なんといつて答^{こた}えたらいい
 だろうかとまどわれましたが、

「わたしには、^{りようしん}両親もなければ、また家もないのです。」と、
 いつか乞食の女がいったことを思い出し、^{おも}だ答えられました。
 すると、その人は、^{ひと}たいそうお姫さまを^き気の毒に思つて、^{ぜに}銭を
 出してくれました。

お姫さまは、^{りよひ}旅費などは用意してきたので、べつにお金^{かね}はほしくもなかったが、こうしてしんせつに知らぬ人^{ひと}がいつてくれるのを、あだに思つてはならないと思つて、^{ふか}深くお礼^{れい}を申^{もう}されました。
^{よる}夜になつたときに、お姫さまは、みんな自分^{じぶん}のような貧しい^{まず}よ
 うすをした旅人^{たびびと}ばかりの泊まる^と安宿^{やすやど}へ、入つて泊まることにな
 されました。そこには、ほんとうに他国^{たこく}のいろいろな人々^{ひとびと}が
 泊まり合^あわせました。そして、めいめいに諸国^{しょこく}で見てきたこと、

また聞いたことのおもしろい話や、不思議な話などを語り合つて、夜を更かしました。また、それらの中には、自分と同じ年ごろの唄うたいがいて、マンドリンを鳴らして、いろいろな歌をうたつて、みんなを樂しませていました。

お姫さまはもとからマンドリンを弾くことが上手であり、また、歌をうたうことが上手でございましたから、自分も、明日からは、唄うたいとなつて、旅をしようと思われました。夜が明けて、太陽が、花の咲いたように空に輝きわたりますと、その宿に泊まったすべての人々は、思い思いに旅をつづけて、散つていつてしまいました。お姫さまは、それを哀しいことにも、また、たのしいことにも思われました。そこで、自分は、すっかり

唄^{うた}うたいのふうをして、この町^{まち}を立つて、さらに遠^{とお}い遠^{とお}い、自由^{じゆう}な旅^{たび}をつづけることになされました。

お城^{しろ}の内^{うち}に、お姫^{ひめ}さまのかわりになつて残^{のこ}った女^{おんな}の乞食^{こじき}は、その日^ひからは、なに不足^{ふそく}なく暮^くらすことができましたけれど、退^{たい}屈^くでしかたがありませんでした。

「いまごろ、お姫^{ひめ}さまは、どうなさつていられるだろう。早^{はや}く帰^{かえ}つてきてくださればいい。」と、明^あけ暮^くれ思^{おも}つていました。

女^{おんな}の乞食^{こじき}は、ふたび、気^きままな体^{からだ}になつて、花^{はな}の咲^さく野原^{のはら}や、海^{うみ}の見^みえる街^{かい}道^{どう}や、若^{わか}草^{くさ}の茂^{しげ}る小山^{こやま}のふもとなどを、旅^{たび}したくなつたのであります。

女^{おんな}は、柱^{はしら}にかかつている小鳥^{ことり}に目^めをとめました。その小鳥^{ことり}は、

お姫^{ひめ}さまがかわいがつていられた美しい小鳥^{ことり}でありました。小鳥^{ことり}は、かごの中^{なか}でじつとして考^{かん}えています。女^{おんな}は、顔^{かお}をかごのそばに近^{ちか}寄せました。

「小鳥^{ことり}や、おまえも産^うまれたふるさとが恋^{こい}しいだろう。さあ、わたしは、いまおまえを自由^{じゆう}にしてあげるから、早く飛^{はや}んでおゆき。」と、女^{おんな}はいいました。

そして、女^{おんな}は、お姫^{ひめ}さまの大事^{だいじ}にしていられた小鳥^{ことり}を、放^{はな}してやりまし^{あか}た。赤^{あか}と、緑^{みどり}と、青^{あお}の羽^は色^{いろ}をした美^{うつく}しい小鳥^{ことり}は、いい声^{こえ}でな^{こえ}いて、お城^{しろ}の上^{うえ}を舞^まつていましたが、やがて雲^{くも}をかすめてはるかに、どこへとなく飛^とび去^さつてしまつたのであります。

お姫^{ひめ}さまは、足^{あし}にまかせて、いつでも、いつでも、はてしのな

い遠くへといつてしまつて、帰ろうと思つても、そこがどこやら
 まったくわからなくなつてしまつたのです。お姫さまは、自分の
 国をばたずねても、だれもその名を知っている人はなかつたので
 す。

「そんな国がどこか、遠いところにあるとは聞いたが、私どもは
 いつてみたことも、またはたしてほんとうにあるのかさえも知り
 ません。」と、人々は答えました。

お姫さまは、悲しくなりました。たとえこうしていることが、
 どんなに自由であつても、ふるさとのことを思い出さずにいられ
 なかつたのです。お姫さまは、いまは、ふるさとを恋しく思われ
 ました。晩方の雲を見るにつけ、空を飛んでゆく鳥の影を見る

につけ、ふるさとを思い出しては涙にむせばれていたのであります。

ある日のこと、お姫さまは、海に見える港のはずれで、独りマ
ンドリンを弾き、ふるさとの唄をうたっていました。そこは、
ずっとある島の南の端でありまして、気候は暖かでいろいろな背
の高い植物の葉が、濃い緑色に茂っていました。女の人
は、派手な、美しい日がさをさして、うすい着物を体にまとい
みちある路を歩いています。男の人は、白い服を着て、香りの高いたばこ
をくゆらして歩いていました。

お姫さまは、太陽の輝いた、海の面をながめながら、心をこ
めて唄を歌っていました。そのときお姫さまは、聞き慣れた、

なつかしい小鳥ことりの声を耳こえにされたのであります。

それもそのはずのこと、お姫さまの大事だいじにされていた小鳥ことりは、かごとで出て、自由じゆうな身みになりますと、夜よるも昼ひるも旅たびをして、自分じぶんの産うまれた南みなみの方ほうの島しまに帰かえってきたのです。

そして毎日まいにち、のどかな空そらに、舞まいさえずりながら遊あそんでいますうちに、ある日ひのこと、下したの方ほうの港みなとで、御殿ごてんにいた時分じぶん、お姫ひめさまのよくうたわれた唄うたと、そしてまさしく、なつかしい同じ声おなこえとを聞きいたから、そばの木きにおりてみたのであります。

すると、まちがいなくお姫ひめさまでありました。小鳥ことりはすぐに、お姫ひめさまが国くにへ帰かえりたいと思おもつても、その方角ほうかくも、また道みちもわからなくて、困こまつていられるのを察さつしたのであります。

「おお、きれいな小鳥だこと、あの鳥は、わたしの飼っていた鳥とよく似ている……。」と、お姫さまは、目ざとくその鳥を見つけると、思われました。

小鳥は、すぐにお姫さまのそばまでやってきて、なつかしそうにくびをかしげてさえづっています。

「おお、おまえは、まさしくわたしの大事にしていた小鳥なのだ。どうして、ここへやってきたの？ わたしは、国へ帰りたいと思っても、道がわからなくて困っています。どうか、わたしをつれていっておくれ？」と、お姫さまは、小鳥に向かって話されました。

それから、お姫さまは、小鳥について、その飛んでゆくままに、

旅たびをされたのであります。

小鳥ことりが、船ふねのほぼしらの先さきに止とまって鳴ないたときに、お姫ひめさま

は、船ふねに乗のられました。そして、はるばると波路なみじを揺ゆられてゆか

れました。小鳥ことりが岸きしに上あがって、木きに止とまって鳴ないたときに、お

姫ひめさまは、船ふねから上あがられました。そして、そこに休やすんでいたろ

ばに乗のられて、砂漠さばくの中なかを過すぎられました。

お姫ひめさまは、その道みちは、自分じぶんのきた時分じぶんに通とおった道みちでないので、

ほんとうに、故郷こきように帰かえることができさるだろうか、不安ふあんに思おもわ

れましたが、小鳥ことりがどこまでもついていってくれるのを頼たよりに旅たび

を続つづけられていますと、ある日ひのこと、お姫ひめさまは見覚みおぼえのある

お城しろの森もりが、あちらにそびえているのをごらんになりました。

「おお、わたしはお城へ歸つてきた！」と、お姫さまは覺えず叫ばれました。

小鳥は、「いま、あなたは、なつかしいふるさどにお歸りなつたのです。あなたが、私をかわいがってくださった、ご恩を返すために、ここまで、あなたをおつれ申しました。」といわんばかりに、木の枝に止まっていきました。

「ほんとうに、ありがとう。」と、お姫さまは、涙に輝いた瞳を上げて、小鳥をじつとごらんなさいますと、小鳥は、やっと安心をしたように、空高く舞い上がって、どこへともなく、雲を遠く飛び去つたのであります。

ちようどお姫さまが、お城を出られてから、三たびめの春がめ

ぐつてきたのでありました。その間に、どうしたとか、門番もんばんの姿は見えませんでした。お姫さまは、乞食こじきの女おんなのことが氣きにかかりながら、お城しろの内うちへとしずみがちに歩あゆみを運はこばれました。

「まあ、お姫さま、お歸かえりでございますか。」と、侍女こしもとは、お姫さまの姿を見みると、目めにいっぱい涙なみだをためて抱だきつきました。

「おまえも無事ぶじでよかったですね。そしてあの女おんなはどうしました？」と、お姫さまも目めに涙なみだをためて聞きかれました。

侍女こしもとは、声こえを忍しのんで泣なきました。そして、

「お姫さま、まことにかわいそうなことでございます。去年きよねんの

春はる、御殿ごてんにお客きやくがありましたて、ご宴會えんかいのございましたときに、殿とのさまから、お姫さまに歌うたをうたつて舞まうようにとのご命令めいれいが

ありました。あの女は、そんな歌も知らなければ、また舞いもで
 きませんでした。それを知らぬというわけにもいかず、その前夜、
 井戸の中に身を投げて死んでしまいました。」と申しました。
 お姫さまは、あの女が、自分の身がわりになつたばかりに死ん
 だことを、たいそうかわいそうに思われました。そして、女の身
 を投げて死んだという井戸のそばへいつて、深く、深く、わびら
 れますと、その井戸のそばには、濃紫のふじの花が、いまを
 盛りに咲き乱れていたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「童話」

1922（大正11）年4月

※表題は底本では、「お姫《ひめ》さまと乞食《こじき》の女
《おんな》」となっています。

※初出時の表題は「お姫様と乞食の女」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お姫さまと乞食の女

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>